

コスモス 37

第 4 次
1982. 4

金洙暎詩論

申 有人 42

追悼 内田 博

12~18

吉田欣一・松永浩介・伊藤正斉
西 杉夫・緒方宗平

前号作品評

寺島 珠雄 26

詩集評

和田 英子 28

ある回顧から

長谷川七郎 30

〈詩人との一時間〉

向井 孝 56

•詩

高島 洋 6	向井 孝 20	西 杉夫 32
黒川 洋 6	申 有人 21	寺島 珠雄 34
暮尾 淳 8	伊藤 正斉 22	本田 晴光 35
和田 英子 8	河合 俊郎 22	野口 清子 36
近藤 計三 10	押切 順三 24	仙石まこと 37
長谷川七郎 10	村松 武司 25	宮田 正平 39
小宮 隆弘 12	緒方 宗平 31・38	秋山 清 55
木原 実 19	山野 チエ 32	

近況一筆

木原 実

あやうく虎口から逃げかえった
という感じである。半年をすぎた
いまでもそうおもう。

脳内出血でたおれたのだが、そ
れはまさしく突然の死である。事
実、そのようにしてたくさんの人
が死ぬる。

「さいわいにして」もうかった
いのちだと若い医者がいう。だか
ら文句をいふ言外に意味をも
たせてそのようにいうこともある。
ともあれ命がらがらにげかえ
た。しかし黄泉の国をのぞいたお
かげで、あつという間に天刑をう
けた。右片まじというやつである。
右足はどうとうの跛行。右手は
だらりとただぶら下っているだけ。
その上言語機能が半分ばかりマヒ

したままだ。
考えるときやしい。右手、右足
それにしゃべることもまなならぬ
とは、私の表現活動のすべてをう
ばうことではないか。

いのちをもうけて、さてと思っ
たとき、考えたことは、奪れたも
のをどうしてとりかえすかにあつ
た。しかしうばわれたものはかえ
ってこない。

去年の九月、ふとしたことでク
レヨンで左手でにぎった。それか
らクレヨンで画をかくことをおぼ
えた。十月から文字を少しづつ書
きはじめた。左手は右手にかわっ
てけんめいの働きをしているよう
にみえる。左手をあわれに思うこ
とがある。

生きるということの具体的なこ
とは、何のことはない、どこまで
も、日常的なこのような努力には
かならない。左手で文字を書く。
それは左手で食事をし、左手でシ
ヤツや上衣を着、左手で日常のこ
とを弁ずることである。

奪われたものはくやしいほど大
きいが、そこからでなおすしかな

いと思ったとき、左手の、ぎこち
ないけれど、けんめいの努力が生
きることのあかしのようにはみえる。
左手がぎこちない文字を、少し
ずつ書きすすめてゆくように、私
の生きかたも、少しずつぎこちな
い歩みをしめすことになるだろう。
それは私にとって、これから生き
るということのすがたをしめして
いるようにみえる。そこには半分
泣きべそをかきながらだが、どっ
こい生きている」ときけぶわたし
のすがたがある。

○
去年六月にたおれてから同人各
位にご心配を頂きありがとうございました。
お見舞状や著書などを
いただきながらお礼を申し上げるこ
とができず心ぐるしく思っています。

内田博さんからは、私と前後し
て倒れられ入院中だが、一本をと
どけてくれといわれたといって息
子の麟太郎君から詩集「童説」が
とどけられた。方法の模索もあつ
て内田の立派な詩集だと思つた。
その内田の境がいの詩集にもあい

さつもしないままにおわつた。
二月の末に内田は死んだと、秋
山清が電話口で言つた。

断片

近藤計三

恒例によつて、今年の一月も、
学生のレポートなど、ほぼ六百人
ばかりのものを一週間ほど必死に
読みつづける毎日であつた。

たしかに、これはたいへんな作
業である。多くの教師が悲鳴をあ
げるのはよくわかる。けれども、
そこはよくまだ新米ということも
あつて、そのしんどさも一つの
楽しみになつてゐる。こんなこと
をいうと、ペテラン教師には鼻で
せせら笑われるかもしれないが、
反面教師的にいろいろと教えられ
てもいい。

もともと、文学というものが、
外国語の習得は別として、教える
というものではないのだからから
レポートだけを提出して単位をか
せこうとする枚数は、出席率だけ

にとらわれていると、ちよつとび
つくりする程の数になつても、一
向に苦にはならない。それだけ、
逆にいえば講義とはまた別の一般
学生（もっとも文学部だが）の動
向もよくわかるのである。

原稿紙にすれば、二千枚ちかく
にもなろうか、それを読んでい
ると、文体の変化だけでなしに、明
治、大正の作家の苦悩も、いまの
若い世代にとっては、なにをウジ
ウジと……ということになるらし
い世相の反映のようなものが感じ
られてくるのである。また、その
作品への読み方も、あくまでも現
在の自己中心の判断で、時代相抜
きの批判が出ていて、そこに一つ
の社会的な思想状況すら感知でき
ることがある。

今年は、もちろん講義としても
とりあげたし、ぼくの内容は別と
しても、大逆事件と平出修の作
品「逆徒」について」のちよつと
意地悪い設問を出し、事前に掲載
図書と参考文献を明示して、試験
場へのノート持ち込みをさせた。
そして、答案から気づいたのは、

このごろの大学の文学部に女子
学生の多いのはいうまでもないけ
れど、その社会的な関心の低調さ
にはあき返つた。大逆事件がわ
からない、知らないという層が、
かなり続出したので、改めて問
かけてみると、高校での歴史は、
だいたい明治維新までで時間切れ
ということでもあり、もちろん大

逆事件も教科書でそう触れない。
そこで、友人の歴史学者にそれ
を話すと、女子の学生と思わな
いで、女の子と思わなきゃ、と一笑
された。そして、ぼくは、テレビ
で放映されていた社会党書記局の
インタビューで、いま政権をとつ
たとしたらどうかという質問に、

異口同音のごとく、党が分裂する、
政権をになう能力がない、と応え
ていた生氣のない書記局員の顔を
思い浮かべないではいられなかつ
た。党内の問題も含めて、大衆と
の乖離していくものは、かつての
ぼくが仕事をしていた労演と観客
の断層でもあり、またいまのぼく
と学生との断層でもあるのだろうか。
いや、ぼくなどより、もっと病

床にある木原実の方が切齒の思い
であらう、と恢復をねがいながら、
きれ切れの断片を考えずにはいら
れなかつた。

『崖』と小室蔵太

押切順三

『崖』という雑誌が昭和14年6
月刊された。奥付には編集小島
信夫、発行浅川淳とある。外にト
ビラ記も後記もなく、くわしいこ
とはわからぬが、号を追ってみる
と15年7月までに四冊出ているよ
うだ。小島信夫の年譜によれば、
大正4年生まれ、昭和13年4月東
大文学部英文科入学、14年に岡本
謙次郎、矢内原伊作らと『崖』を
創刊、「往還」その他を発表、と
ある。創刊号には浅川淳、西嶋文
夫、加藤周一、落合昌造が創作、
小室蔵太が詩「太陽のにおい」を
載せている。

東大文学部同窓の文学誌らしい
が小室は法学部学生であつた。小
室は『崖』四冊に、詩四篇と創作

一篇を発表した。
おれは、ただ鳥のようにとび回
りたいのだ。
人間の心を持つて。
文明文化が進むに随つて、人間
の憂鬱は深くなる。人類は自殺
の時期へ進行しているのだ。自
然的消滅を待たずして、諸君。
そう思うことはないか。おれは
そんな気がした。

（昭和14『崖』二号「淋しさに
まかせた不平」から）
こんな詩を書いた。日本は戦争
に崩れ落ちる崖っぷちの時代であ
つた。小室には、権力も国家も、
それを支えている学問というもの
も詩の対象とはならなかつた。乾
いたニヒリズムというのが彼の詩
にあった。

小室蔵太、本名菊池臣平、大正
4年3月秋田市生まれ、
私が昭和21年5月、兵隊から帰
つて秋田県農業会に復職すると、
この菊池さんがおつた。県農業会
というのは得体の知れない大世帯
で、いろんな人がもぐりこんでい
た。私は三歳年上のこの人につい

ていろんなことをした。『崖』の

ことも聞いた。農業会解体で菊池さんは秋田大学に移った。その後

のつきあひもあった。私は戦後、そろそろと詩を書き始めていた。

昭和54年12月4日菊池臣平死亡、64歳、秋田大学教育学部(政治学)教授であった。『コスモス』32号「とむらい」が私の弔歌。

『崖』

や秋田大学芸部当時の雑誌『小沙漠』や、多くは手帖に書き残した詩を整理して『菊池臣平詩集』が近く出る。私も手伝ったが、そのなかの一篇を書き写しておく。

雁

隠居してノラリクラーと死ぬまでくらしたい。

もう追いたてられるような生活をおくりたくない

風のない日は心が落着く。

雁のひと声で空を見上げる

「ひゅんひゅん」「はむはむ」

「ひよんひよん」

鍵になって西から東へとんでいく雁

六十五羽か七十羽ぐらいだ

(一九六六)

二月の日記から

野口清子

二月二日 水道凍りつき寒い朝。今日は小熊つね子さんの告別式。

場所は落合葬祭場とある。電話で確める。黒のスーツに着更えて家を出る。

葬祭場では告別式が始っていた。仏前で小田切秀雄氏が話していたが、よく聞きたれなかった。

出棺の時、線香を供え、初めてつね子夫人に直面する。つね子さんと親しかった、詩人郡山弘史夫人吉江さんが「こんなに小さくなってしまつて」と泣いた。傍に菅原さんと佐多稲子さんが立っていた。私はよく咲きそろった蘭の花でつね子さんのお顔を飾った。

昨夜の新聞で知った。「富裕な家庭に育ち、小熊との結婚に親は反対したが「何か」に魅かれて結婚。収入も途絶えがちな貧乏生活。小熊は開けっ広げで女性を家に連

れてきた。帰る時、小熊と腕を組んで出て行く女性もいた。」

小熊の詩「蹄鉄屋の歌」は焼けた蹄鉄を爪にアゲがわれ、やがて強く成長する小馬をうたった。

「小馬のように焼けた蹄鉄を生身の体に何度も押しつけられました。そんな中から、人間と人生と社会とを痛切に知りました」とつね子さんが語ったと言葉が、私の胸に焼きついた。小熊は昭和十五年結核で逝き、一人息子も結核で亡くした。夫の作品を大切に保存し続け、昨年十一月多摩霊園に小熊の墓が完成してから、身心が急に衰えたという。

貧困と孤独の長い年月に耐え、せまいアパートの一室で、ひっそりと逝ったつね子さんの死を思う。二月九日 昼近く電報が配達されてきた。

「ナカムラズヌシス」キヨウ温さんが死んだ。最近私は五十年代に創刊し、三十五号まで出して終った同人誌「JAP」の歴史というか、発表された作品を通して

産するという最悪の有様となった。過日、京都立命館大学の有志が今度の事故で夫を亡くした女性を呼んで、当時の模様を聞く集会があった。その時の録音テープを聞く機会があったが、事故の無惨な様子を訴える悲痛な話の中で「組合さえも」としかりしていてくれたら」という一言が、強く私の胸を打った。増産タタの強制が、この事故の直接の原因であったとしても、そこまで会社を追いつめた政府自民党のエネルギー政策の無策をこそ厳しく問われるべきであるとの感を改めて深くした。(一九六六・二・二〇)

和田英子詩集「点景」の出版記念会

高島 洋

和田英子詩集「点景」の出版記念会は、昨年十一月二十一日午後二時から神戸の国鉄三ノ宮駅から南へ神戸市役所の西側、市民協会展館で開催された。

小島輝正(仏文学) 足立巻一、

てまとめておきたいと思っていた。

温さんなら資料をそろえているだろう。一度電話して見ようと思いがらのびのびになっていた。私達の仲間はみんな、オンサンと呼んでいたが、温と言う字がタズヌと読むのだと初めて知った。

何人かの友人に彼の死を伝える電話をしながら、心はアメリカ軍占領下にあったあの時代に戻っていった。米軍基地拡張反対、さまざまな抵抗斗争。JAPの前衛的部分はその渦中にふみこんでいった。そこに党の権力が動き、不信が育ち、友情を傷つけ、温さんの死も、それぞれの人の受け止め方は違ふのだ。

二月二十七日 朝、内田麟太郎夫人から電話。博さんが亡くなったという。麟太郎氏は亡くなる寸前に会えたと言う事。今日はお葬式なのだ。「詩集「童説」は、内田さんが沙漠化する地上に残してくれた花だと思えます。内田さんサヨナラ」と電報打って涙があふれた。

夕張のこと

宮田正平

北炭夕張のガス突出事故は、私にとって殊のほか大きな衝撃だった。事故の経過を追うニュースに私はTVの前に釘づけにされた。「殊のほか」というのは、私自身がこの炭坑の住宅、いわゆる炭住で生まれ育ったからである。

私はここで小学校に入るまで過したが、その頃炭坑の爆発は珍らしくなかった。一九二二年六月、勤務交替で坑口の守衛室で雑談していた父は、爆風で三十米余り吹飛ばされたが、左足首の骨折だけで、幸い命拾いをした。退院すると月に二度、町の病院に松葉杖を頼りに通った。馴れない松葉杖にすぐ疲れる父に私はいつもお供をするのが役目だった。この事故をききかけに、翌年春父祖伝来の郷里秋田に帰った。私事はともかく、TVニュースを見ていて驚いたのは、出坑口の前に職員の社宅とおぼしき鉄筋コ

ンクリートの高層の建物が見られたが、一本の煙突も出ていないのである。つまり石炭ではなく、石油で暖をとっているものと思われた。私がいた頃と思ひ合せると何かちがうな感じがした。

それと、子どもたちの遊び場の一つだったボタ山には、その頃植物といえるものは、一本の雑草もなかった。それが何という木であろう、直径二十厘前後の裸木が横なぐりの吹雪にゆさぶられている光景が異様に見えた。

思えば、あれから六十年が過ぎている。炭坑の設備が、機械化が進み、ボタ山に草木が生えたとて不思議はない。

それなのに、地底に残された労働者の救出に、会社は何の手を打つことも出来ないまま、地下坑道の火災発生を理由に、地下への注水を提案組合もこれに同調して、地下坑の労働者を生きたがりにして殺すという大悲劇を敢えてやってしまった。そして会社は事態収拾に対する無策のまま、ついに会社更生法の適用を申請、かくてヤマは事実上倒

杉山平一、小林武雄、安永稔和、風呂本武敏(英文学) 各氏の顔ぶれをはじめ在阪神詩人六〇名の出席が見られた。

コスモスからは秋山、向井、寺島、近藤、高島らが出席した。

詩集「点景」に対する批評としては、和田英子は従来からの自分の作品スタイルに一定の完成を示している。今後への希望として別の方法への模索もあるべきではないかとの意見もあったが、出席者の殆んどから好評の意見がのべられた。なかには和田英子はコスモスに加入してところを得ているのではないかと意見も聞かれた。

発起人の一人としてわたしが言うのは気がひけるが盛会であったと自認している。

しかしそれは神戸の中堅詩人である直原弘道、松尾茂夫、三宅武、岩淵欽哉氏の準備段階での努力と奔走があったからに外ならない。尚和田英子の詩集「点景」は兵庫県文化団体、半どんの会の文化賞(文芸部門)を受けた。

ハイライト

高島 洋

わたしは上を向いて寝台に横たわっている
スイッチを押す

腕型ロボットが動きはじめる

スチールの手が棚上のジュースビンをつかむ

コップにジュースを注ぎいれる

ビンを置きコップに持ちかえる

一定の速度で徐々にわたしに近づいてくる

わたしの顔のままでコップがびたりとまる

そのとき

わたしの視線がイチゴジュースの紅色をとおして

窓から差込んでくる陽光と交差する

キラッとひかり

血のしたたる腕がある

人形型のロボットがスプレーをもって塗料を吹き
つけている

腕型のロボットがノズルをもって自動車のボデー

を熔接している

火花のようにとび散る火花

人体の機微にいまだ及ばぬというものの

実直で正確なその仕事ぶり

逐われる労働者はどこへゆく

このさい

日ごろきたえた素人芸にみがきかけ

爆発する喜劇ブームにのっかって

喜劇役者もよし

ピエロにでも変身するか

所詮 この国は国際的にも

列島の形がロボットに似ている

破断〈ブレイク・アウト〉

黒川 洋

ひと仕事終えて。

じや口をひねり

洗面器に水を満たす。

顔を洗おうとする。

と 洗面器が流れていく。

追いかける。

急いで押さえる。

手を離す。

流れる。

体重をかけて押さえる。

器がへしゃげる。

手を離す。

むなしく流れていく。

額に汗を浮かべて押さえる。
止まれ！

怒鳴りながら水をしゃくって

顔に持っていく。

と こんどは顔がない。

鏡のなかの俺を探す。

〈祝！安全百万時間突破〉

背後のポスターだけが映っている。

流れていく。

眼にする視界がすべて流れる。

立ちくらみのなかで

かすかにチャイムが鳴り

金属的な声が襲う。

（ヨウセツラインのハンソウダイに

№1732のカオをワスレタ

ニンゲンはシキユウ

コントロールセンターマデ

シュットウセヨ）

北の旅

暮尾 淳

バガラーンと
そんなに遠くはない天が
からっぽのドラム缶をころがす。
くもり日の中空を
気のなさそうに煙がひろがる。
そこがどこかははっきりしないが
そこには火山灰の斜面を下り
ブナやミズナラの林相を抜け
沢を幾つか渡ってゆかねばならぬ。
頂は雲にかくれ
家族は列になり
耳をそばだてている。
鳥は飛ばず

四人が見おろすはるかな盆地の
草いきれのなか、
迷彩服で彼ら匍匐前進
小走りに駆けこんだり
水筒のみずを飲んだりしているのだろう
ぼくらのデフェンス・アーミー。
演習地の
野砲の
バガラーンバガラーンという音である。
夏のみどりとまひるの遠景。
それは玩具の兵隊の
汗のひとかき。
だが何ごともたしかには見えず
姉と弟と
ちちははと、
新しいそれぞれの出発の
北の旅に
バガランバガラン
と不粋なりズムなのである。

山茶花こぼれ

和田英子

目に朱いものが降ってきた
上向くと
山茶花をくわえ
ヒヨドリが電線にとまっている
嘴に余る
垣根からもぎとった
血のようにあかい花びら
遠い日
常時クラスの焦点にいた人の
海軍士官との結婚 離婚
あと市電とS電鉄が交叉する踏切りに
身を投じた

元神主の娘
老成の背中から駆けぬけた
はやい結末に
三つ編みのお下げ髪みだれ
勝ってうれしい花いちもんめ
敗けてくやしい花いちもんめ
戦争のあと
さき
人気のない境内に焼けのこる
石碑くろずみ
ヒヨドリに変身した
死んだ少女が
花びらをくわえ
屋根から空へ
急降下してテレビアンテナへ
ついとむこうへ
あかい血をしたたらせて
とぶ

溶ける街

近藤 計三

《招牌》という意識だ。
電気店らしくもなく
文字のペンキも剥げ晒けている。
閉ったガラス戸の向う
カーテンも埃りでしらけている。
義理の兄貴だもんな、しやあない。
行方は杳としてわからん。
理髪士のくろずんだ白衣をひっかけ
鏡の奥の幼馴染みが
あんたも天頂^{てんぺん}だけ薄うなったな、と笑い
俺の髪を鋏で無難作に剪った。
白毛まじりの毛玉が
身じろぎできない俺の眼線ではらけ散る。

いつときは債権者もへたり込んで
大騒わぎだったよ、とあっけらかんと喋った。
俺もそれで安堵した。
行先不明は生きている証拠だ。
あの両隣りも買いつって
ひよろながい食堂ビルが建つんやて。
俺は鏡面の端っこで斜めに傾^かしぐ
ふるびた家屋の構えに残る記憶をさぐりながら
奇妙な連帯だな、とこぼれる毛屑のからまりを
ひと息で吹きとばし
どこまでも遁げるこったと応えていた。
かみさんとも別れたらしい。
そういつて友人は電灯のスイッチを入れた。
白光灯が頭上で虫鳴きの音をたてとともると
鏡に反転して映る街はもう昏れて
薄らばんやりと闇に溶けはじめている。
俺は黙って倒される椅子の背にもたれ
離合集散の時刻を逆転文字の時計で量っていた。

あるとき猫について

長谷川 七郎

思いだすと猫はどこにでもいた気がする
深夜ローマの空港待合室で
餌をねだって
ひとなつこく子猫がすりよってきた
繁華街のまん中のコロセウム遺跡を
すて猫の大量が占居したと
ひる間 新聞が報じていた
またあるとき
コーカサス山中の
ローカル空港の野良猫は
愛撫がすぎると
するどい爪を構え

猛然と毛を逆立てた

又

奇妙なことに

本場のタイやイランで

肩をいからせ いばりくさって

大道をへいげい 闊歩する猫や

洗濯物の垂れさがる アラブ街の軒下で

横着をきめこんで 喉をならす猫どもで

シャムネコや ペルシアネコを見たことがない

シロ クロ ミケ トラ キジ……の野良猫はか

りだ

顔にアンバランスな斑があり

きりょうはぶちこわしだが

あいきょうのあるのもそっくりだ

抱きあげると

肌ざわりや 身のこなしが

微妙にちがうところも

人間どもとかわりがない